

## 『枕草子』「春はあけぼの」段の授業構想

猪 川 優 子\*

Class Improvement of the Chapter “Haru ha akebono” in “Makura no soushi”

Yuko IKAWA\*

### はじめに

平成28年12月、中央教育審議会より「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」<sup>1)</sup>の答申が公表された。次期学習指導要領では、「生きる力」の理念の具体化および「社会に開かれた教育課程」の実現が掲げられ、新しい時代に求められる資質・能力を踏まえた「学びの地図」の可視化が前面に提示されている。また、「主体的・対話的で深い学び」については、表面的な取り組みにとどまらずに生きて働く学力となるよう、学習指導過程の質的改善が求められている。

中等国語に関しては、中学校、高等学校それぞれにおける現行学習指導要領の課題が次のように示された。

中学校では、伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや、複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価することなどに課題があることが明らかになっている。

高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている。

高等学校の課題として古典に対する学習意欲の低さが挙げられているが、古典学習の入門期であり基礎固めが進められる中学校国語科においても、看過できない課題である。高等学校の古典学習は中学校の古典学習の延長にあり、古典に対する学習意欲の低さの一因が、中学校における古典学習にあるとも考えられるのである。また、小学校課程においても、古典教育を組み込んだ国語科教育を形成するという流れへと向かっている。古典学習は、小・中・高の学習系統を踏まえてそれぞれの段階における学習を考える必要がある。

本稿は、小・中・高すべての校種での取り扱いがある『枕草子』「春はあけぼの」段を取り上げ、古文教材としてのさらなる可能性を追求するものである。なかでも「春はあけぼの」段は

\* 本学准教授

すべての中学校教科書の教材となっていることから、本稿では中学校国語科古典教材としての授業を構想することを中心とする。現代に生きる生徒たちが、『枕草子』『春はあけぼの』段とどのように向き合い、何を学び、いかに活用することが出来るのかを模索していきたいと考える。

## 一 現行の中学校教科書における取り扱い

『枕草子』『春はあけぼの』段は、平成27年文部科学省検定版中学校教科書の五社（東京書籍、学校図書、三省堂、教育出版、光村図書）五種版すべてに掲載されている。ただし、東京書籍・三省堂・教育出版・光村図書版が2年次の学習教材としているのに対し、学校図書版は3年次の学習教材としている。次に、各教科書における目標と学習事項を挙げる。

【東京書籍】＊『徒然草』との組み。「春はあけぼの」「九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の」段を扱う。

○目標…筆者のものの見方や考え方、表現の仕方を捉える。／見聞きしたことや体験したことをもとに、表現を工夫して随筆を書く。

○手引き

・読み取る…「枕草子」の筆者は、「九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の」の中で、どのようなものを「をかし」と感じているのだろうか。

・考えを深める…「枕草子」と「徒然草」の四つの章段から、よい表現だと思うところや、おもしろい目のつけどころだと思うところを探し、発表し合おう。

・書く…「枕草子」と「徒然草」に倣って、見聞きしたことや体験したことをもとに、短い随筆を書いてみよう。

【学校図書】＊「春はあけぼの」「うつくしきもの」「香炉峰の雪」段を扱う。

○目標…発見を促し感受性を広げる言葉の力を捉える。／言葉を共有する喜びを捉える。

○学びの窓（発見する言葉）…「春はあけぼの」を読んで、発見を促し感受性を広げる言葉の力に触れよう。

・「春はあけぼの」から、季節ごとに、1表現されている対象は何か、2時間はいつか、3どのような変化や動きが表現されているかを抜き出してみよう。

・筆者の言う「をかし」「あはれ」「言ふべきにあらず」「つきづきし」「わろし」に合う自分の体験を挙げてみよう。

【三省堂】＊『徒然草』との組み。＊「春はあけぼの」「うつくしきもの」段を扱う。

○目標…自然や人間に対する、筆者のものの見方や感じ方を捉える。／古人の心情を現代の自分たちとの対比の中で読み取る。

○学びの道しるべ

・声に出して読もう…意味の切れ目に注意して繰り返し音読し、暗唱しよう。

・考えを深めよう…筆者が「をかし」と評価しているものを季節ごとに書き出して整理し、筆者がそれぞれの季節に対して、どのように感じているか、考えよう。／どの季節にいちばん共感できるかについて、自分にとっての「をかし」を加えながら、考えよう。

【教育出版】＊『徒然草』との組み。＊「春はあけぼの」「うつくしきもの」段を扱う。

○目標…古人のものの見方や考え方に対して、自分の考えをもつ。／言葉の意味を正確に捉えながら読み、筆者の思いを想像する。

○みちしるべ

- ・ 確かめよう…二つの章段を声に出して読み、それぞれの内容をノートにまとめよう。
- ・ 深めよう…二つの章段に表れた、筆者のものの見方や考え方について話し合おう。
- ・ 考えよう…「春はあけぼの」の章段を参考にして自分の季節感を文章にまとめたり、「うつくしきもの」を参考にして「ものづくし」の文章を書いたりしよう。

【光村図書】＊「春はあけぼの」段を扱う。

- 目標…作者の四季に対するものの見方や感じ方に触れ、自分が感じる四季の趣と比べてみよう。
- 書くこと…自分流「枕草子」を書こう。
- ・ 清少納言は、「枕草子」で四季それぞれの好きな時間帯を挙げ、その趣を書きつづっている。「春は……。夏は……。」などの書きだしを借り、自分ならではの季節感を表す文章を四百字程度で書いてみよう。例に示した四季折々のものを参考に、それぞれの季節の好きなものを表現しよう。(例 その季節らしい食べ物・行事・植物・動物・天候・身の回りのもの)

「春はあけぼの」段の取り扱いを一覧すると、単独での扱いは光村図書版のみであり、東京書籍・三省堂・教育出版版は『徒然草』と組み合わせ、さらに『枕草子』に関しても複数の章段を取り上げて学習させる。本章段を3年次に学習させる学校図書版は、『枕草子』を単独で取り上げるが「春はあけぼの」段以外に二章段を取り扱う。

本章段を単独で取り上げる光村図書版の古文学習系統に着目すると、1年次で「いろは歌」の音読等の導入を経て『竹取物語』を入門期作品として学習したことを受け、2年次の一学期

に相当する時期に学習するという流れになる。2年次の国語科学習は、詩、小説、古典(本章段)と進められ、2年次の中盤に『平家物語』『徒然草』の二作品を古文として学習する。3年次で本章段を取り上げる東京書籍版の古文学習系統は、1年次に『竹取物語』『宇治拾遺物語』を学習し、2年次では『平家物語』『徒然草』を学習するという流れとなっている。

本章段を2年次に位置付ける東京書籍・三省堂・教育出版・光村図書版の目標には、表現に多少の違いはあるが「筆者のものの見方や考え方」を捉えて「自分の考え」に生かすという共通点が見られる。また、東京書籍・教育出版・光村図書版では本章段の読み取りを踏まえて随筆を書かせるという学習を含む。これらを現行の平成20年版学習指導要領と照応すると、第2学年の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)ア(イ)「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」や、2内容B書くこと(2)ア「表現の仕方を工夫して、詩歌をつくったり物語などを書いたりすること」が踏まえられていると捉えられる。ただし、随筆の創作は現行の学習指導要領に明示されておらず、「物語など」に含まれた形となっている。

## 二 次期学習指導要領における位置付け

平成29年(2017)3月31日に次期学習指導要領が告示された。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた創意工夫ある授業改善が求められ、育成を目指す資質・能力が「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」の三つの柱として明確化された。

中等教育の学習指導要領改訂の動きは後に示す表の通りである。改訂は移行期間を経て実施され、間に教科書検定および教科書採択・供給を挟む。高等学校は中学校より一年遅れで進められる。

なお高等学校国語科では、共通必修科目として「現代の国語」「言語文化」が、選択科目として「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探求」が予定されている。

年	中学校（教科書）	高校（教科書）
平30 2018	移行期間	周知徹底
2019	（検定）	移行期間
2020	（採択供給）	（検定）
2021	全面実施 （使用開始）	（採択供給）
2022		年次進行実施 （使用開始）

中学校古典に関しては、現行の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が「知識及び技能」(3)「我が国の言語文化に関する事項」の「伝統的な言語文化」となり、各学年での取り扱いは以下のようになっている。

#### 【第1学年】

- ア 音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむこと。
- イ 古典には様々な種類の作品があることを知ること。

#### 【第2学年】

- ア 作品の特徴を生かして朗読するなどして、

古典の世界に親しむこと。

- イ 現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知ること。

#### 【第3学年】

- ア 歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。
- イ 長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして使うこと。

次期学習指導要領では、各教科の内容について「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」が明確に分けられておらず、相互に関連する柱となっていることから、古典の学習内容をどのように位置付けていくかという問題は、様々な角度から吟味する必要がある。

『枕草子』『春はあけぼの』段を引き続き古文教材に取り上げる場合、どの段階でどのように扱うことになるのか。次期学習指導要領では、第2学年の「知識及び技能」(3)イに「古典に表れたものの見方や考え方を知ること」とあり、現行の東京書籍・三省堂・教育出版・光村図書教科書四種は、目標を踏襲しつつ2年次で取り扱うことが可能である。3年次での扱いとなっている学校図書の場合、「言葉」を重視する立場を取っており、今後の位置付けが注目される。

注意されるのが、「随筆」を書かせる学習である。次期学習指導要領「思考力、判断力、表現力等」B「書くこと」の言語活動例で、次の内容が示された。

#### (2)ウ

- ・第1学年…詩を創作したり随筆を書いたりするなど、感じたことや考えたこと

を書く活動。

- ・第2学年…短歌や俳句、物語を創作するなど、感じたことや想像したことを書く活動。

現行では明示されなかった「随筆」が1年次の指導例に挙げられた。創作に着目すると、1年次では「詩」「随筆」、2年次では「短歌」「俳句」「物語」と、分野を分けて提示されたのである。「など」とあることから、幅があると捉えることも可能であるが、学習指導要領で示されたことをどのように解釈するかが問題である。個々の教材がもつ力を精査し、学習指導要領が示す方針とのすり合わせを吟味する必要がある。

### 三 「春はあけぼの」段をとらえる

#### —作品世界と生徒との距離—

本稿では、次期学習指導要領第2学年〔知識及び技能〕(3)「我が国の言語文化に関する事項」「伝統的な言語文化」イ「現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知ること」を受けて「春はあけぼの」段の授業構想を考える。

『枕草子』は平安時代、清少納言によって書かれた。今から千年以上も前の、宮中に勤めた女性と、現代に生きる生徒との距離は遠い。その距離をどのように近付けるか。小山清 [2001]<sup>2)</sup>は、「古典入門」が(1) 古典を読む基礎を身につけ、(2) 現代とのかかわりを探る態度を身につけることであるとする。「現代とのかかわりを探る」ことに着目して現行の教科書が示す目標や学習事項を見ると、自身の見聞や体験を随筆にする活動や、作者の季節感に対する自身の考え方を探る活動を通して、作品と生徒との距離を近付けようとする意図がうかがえる。

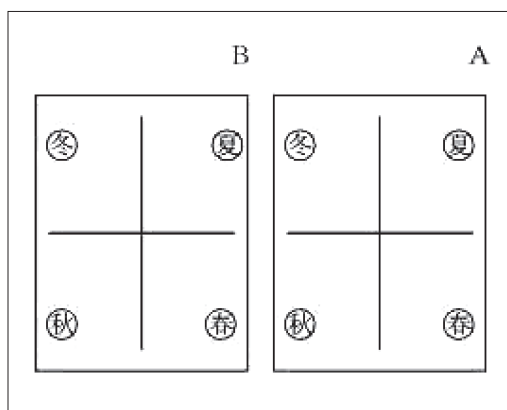
ここでは「春はあけぼの」段の導入を構想す

る。現代であっても、生活と四季の移ろいは密な関係にある。日本から四季が消え去らない限り、本章段の筆者清少納言と生徒たちとのつながりが消えることはない。問題は、筆者と生徒たちとの距離である。

まず、本章段に描かれる事物・事象と生徒たちとを出会わせたい。本章段の春、夏、秋、冬それぞれ季節において、特徴的に表れる事物・事象のうち漢字一字で表せるものを次に挙げる。

春…紫、雲  
夏…月、闇、雨、螢  
秋…烏、雁、風、虫  
冬…雪、霜、火、灰

これらのうち、8つの語をキーワードとして取り上げ、二段階に分けて提示する。用意するワークシートは、次のようなものである。



〔発問例〕

- T1 今から全部で8つの言葉を挙げますので、それぞれの言葉が「春」「夏」「秋」「冬」のどの季節に合うのか、自分の感覚で分類しましょう。プリントの「A」欄をします。
- T2 まず、「風」「火」「雲」「月」の4つの言



葉を分類します。A欄の四季それぞれの枠内に記入しましょう。同じ季節に複数の言葉を記入しても構いませんが、同じ言葉を複数の季節に記入してはいけません。

- T3 続いて「雨」「炭」「紫」「鳥」の4つの言葉を分類します。先ほど記入したA欄に書き加えましょう。
- T4 なぜその言葉をその季節に分類したのか、ペアを組んでお互いに説明しましょう。
- T5 今度はB欄に、自分が考える四季の景物を書き込みましょう。数に制限はないので、思いつく限り挙げていきましょう。
- T6 グループ（4～6人）で、B欄にそれぞれどのような言葉を挙げたのかについて情報交換し、季節感について話し合しましょう。後ほど各グループでの話し合いを全体で共有します。
- T7 それでは、『枕草子』「春はあけぼの」段の学習に入りましょう。範読を聞いて、先ほど挙げた8つの言葉を本文から探し、A欄に赤で書き込みましょう。

ここで注意するのは、T2・T3ではなるべく季節を主張しない言葉を選ぶことである。生徒の思考過程において葛藤させることが重要であり、「正解」「不正解」を求めているのではない。たとえ本章段をすでに知っている生徒であっても、ここでは自分の感覚でそれぞれの言葉を捉えさせることを徹底する。そしてペアで説明することによって、互いのものの見方・考え方を知る。

T5・T6では、ペア学習よりも少し人数を増やして季節に対する見方・考え方を捉えさせたい。予想される言葉としては、「春…桜」「夏…海」「秋…紅葉」「冬…雪」が多いと考えられ、

その他様々に挙げられる言葉も含めて、季節感に対する意識を敏感にし、思考の構えを作っていく。

本章段の春における「花」の不在について、藤本宗利 [1996]<sup>3)</sup> は、作者が花を黙殺することに対して、読者が「この沈黙はどんな意味を持つのか」と自問し、そういう作品との対話を足がかりにして読書行為に参加できるであろうことを指摘する。さらに、花の不在に気づいた読者が他の多くの風物の欠落に気づき、一転「冬は」の雪の登場に当惑すると述べる。藤本は本章段と読者との関係について、「対話というよりも、いっそう挑発的で、知的な緊張を孕んだ、むしろ謎かけのような仕掛けなのである」とし、和歌の伝統性からの「ずらし」の方法や漢籍の教養を見出す。また、『枕草子』が「歪んだ鏡」とし、読者は「自らの美意識、価値観。自らの知性。詩歌の教養と笑いのセンス。そして自らのものの考え方の基底にある社会的通念」と向き合うことになるとする。

『枕草子』が和歌的な美意識から離れた世界を構築していることに関しては諸氏が指摘するところである。ただし、ここまで踏み込むのであれば次期学習指導要領の第3学年「歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと」を基にした授業を構想する必要がある。ここでは、桜の不在が「自らのものの考え方の基底にある社会的通念」からの「ずらし」であるとする捉え方を起点として、生徒の思考を導きたい。T5・T6を通して現代の季節感を話し合うことは、現代の社会的通念をあぶり出すことである。あぶり出された社会的通念と、生徒それぞれの季節の捉え方が完全に一致するわけではない。生徒の内面にも「ずらし」が存在するのである。その「ずらし」を意識して季節を捉え、表現することが、「春はあけ

ぼの」段からの学び、清少納言の言語表現からの学びとなると考えるのである。

#### 四 「春はあけぼの」段のものの見方・考え方—内から外へ—

さらに、本章段の「ものの見方・考え方」について掘り下げていく。『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説・国語編』<sup>4)</sup>では、ものの見方・考え方について、次のように示された。

深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で考えていくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。

ここで、「どのような視点で物事を捉え」「どのような考え方で考えていくのか」とされていることに注目する。現行の中学校教科書における「春はあけぼの」段の取り扱いを見ると、三省堂版に「どの季節にいちばん共感できるか」という視点がある。しかし、「何を」書いているのかという内容への共感だけではなく、「どのように」書いているかという表現への共感に生徒の思考を向かわせたい。筆者の好みと自分の好みの比較や、筆者が取り上げた事物・事象の可否を問題にするだけではなく、言語能力の向上を目的とした学習の観点を立てることによって、深い学びが実現すると考えるのである。

「春はあけぼの」段は文章としての完成度が高く、清少納言は優れた言葉の使い手であるといえる。論理的で明快な主張を軸とした構成、平易かつ巧みな言葉選びから学ぶことは多い。清少納言がどのようにして、このような言語能力を身に付けたのかという点は非常に興味深く、生徒に迫らせたい観点でもある。塚原鉄雄[1976]<sup>5)</sup>は、清少納言の言語観について次のように述べる。

清少納言は、言語表現の具有する相補的充足性を洞察し、その効用を発揮しえた才媛であった。そして、そのことが、言語表現の具有する自立的充足性に、峻烈で鋭敏な認識と主張とを確保させたのである。言語の表現としての限界を知悉するがゆえに、言語の本質を把握し、言語の特性を洞察し、その認識と実践とに、卓越した足跡を、数多く記録した。表現行動としての相対的座標を理解することによって、言語表現の絶対的意義を洞察しえた、史上に数少ない女性であったといえよう。

また、次のように指摘する。

彼女にとっての言語表現は、ナニヲという条件とドノヨウニという条件とを、充足させる表現でなければならなかった。それは、言語表現の伝達機能と鑑賞機能との均衡を、要求し期待するものであったと想察する。

生徒には、「何を」と「どのように」とが的確に結びつくような表現を意識させたい。秀逸な表現とは、突飛な表現ではない。言語は、自己表現の有効な手段ではあるが、いかなる表現も伝達機能の側面を備えていなければならない。

清少納言の生きた時代と生徒が生きている時代とでは言語環境が異なるが、清少納言の言語観に迫ることで自らの言語観を高めることにつながるのではない。また、自らの言語環境を改めて振り返る機会ともなろう。今後、『枕草子』全体を見通したうえで、言語能力の向上を目的とした体系的な学習を構築することが、深い学びへとつながると考えられる。

筆者の「ものの見方・考え方」を捉えるにあたり、清少納言が「どのように」見たかという点も重要である。現代に生きる生徒から見える世界は、清少納言から見えた世界とは比較にならないほど広い。特に行動範囲や異性との接触範囲には、大きな違いがある。先の〔発問例〕T5・T6で生徒自身が思い浮かべた季節の事物・事象は、清少納言にとって生涯目にする機会がないものも多く含まれている。しかし、行動範囲が広がれば、比例して豊かな世界を描けるわけではないことを、「春はあけぼの」段は教える。本章段に対峙した生徒たちは、清少納言が生活していた空間の狭さを意識することはない。ここに、清少納言の卓越した観察眼と着想力がうかがえよう。

増田繁夫〔1996〕<sup>6)</sup>は、『枕草子』第73段の記事などから、清少納言の生活空間であった「細殿」の様相を読み解く。その中で、次のように「見いだす」視線に言及する。

枕草子にかぎらず、一般に当時の女性の作品には、筆者たちの身を置いている世界が、いかに狭く閉じられたものであるかを思わせる記事が多い。日常は建物の外にでることがないだけでなく、さらに身分の高い女性は、母屋から廂の間に出ることさえもはばかる生活であったから、室内から広くまばゆい屋外の景物にやる女たちの視

線は新鮮で鋭く、外界から内側の彼女たちの世界に入り込んでくる物音は女たちの想像力を強く刺激し（一八七段など）、心を屋外の果てしない世界へと浪漫的にいざなうことが多かった。

生徒は、社会科学習で得た知識を教科横断的に活用し、『枕草子』で清少納言が描いた世界を読み解いていく。本作品は、平安時代の宮中生活で見聞きできることが、生活者自身の視線から描かれたものである。室内から屋外への視線は、屋内外の広い世界が与えられている生徒たちにとって、日常のものではない。各教科で学習した知識を関連させて、より深い理解へとつなげることが重要である。

この、「内から外へ」と見いだす視線を、随筆を書かせる学習に取り入れたい。生徒たちの生活すべてを室内に閉じ込めることはできないが、室内から屋外への視線を持たせることは可能である。現行の教科書に見られる学習指導では、「春は」から始まる本章段の構成を模して、自分なりの季節の捉え方を自由にまとめる形をとっている。そこに、「内から外へ」見いだす視線を条件として加えるのである。生徒は、校舎や教室、自宅といった建物の内側から見える屋外の事物・事象に限定して「何を」「どのように」書くのかを吟味する。また、春夏秋冬の構成に縛られるのではなく、授業時の季節を取り上げて書かせる。今までの経験を基にするのではなく、実際に周りの事物・事象に目を向けて書く対象を探することで、清少納言の観察眼と着想力に対する理解が深まると考える。

以上のような学習は、『枕草子』が古典作品であるからこそ可能であるといえる。筆者の「ものの見方・考え方」は、筆者個人に拠るだけでなく筆者が置かれている環境に拠るところも



大きい。生徒たちは、現代の生活からどのような事物・事象を見いだすであろうか。「内から外へ」視線を限定することにより、新たな発見も期待できる。さらに、その発見を表現し、他者と共有することで、言語能力の向上が果たされるのである。

## おわりに

学習指導要領が改訂され、古典教育も変革を求められている。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、教材がもつ力を改めて精査する必要がある。現代に生きる生徒たちが、古典から得た学びを活用し、人生や社会に生かすことができるよう、学習の見通しを立てなければならない。

2019年には中学校教科書の検定が実施され、2020年に採択・供給される。次期教科書に『枕

草子』「春はあけぼの」段が掲載されるかどうかはまだ不明であるが、本章段は「主体的・対話的で深い学び」を可能にする要素を多分に含んでいる。今後、小学校から高等学校までの系統的な学習を視野に入れて、『枕草子』の教材としての価値を模索していきたい。

## 注

- 1) 文部科学省・中教審第197号。
- 2) 小山 清『国語科教育の理論と実践』（2001年 溪水社）。
- 3) 藤本宗利「読者論として一鏡としての枕草子」（『国文学解釈と教材の研究』1996年1月 學燈社）。
- 4) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説・国語編』（2018年3月 東洋館出版社）。
- 5) 塚原鉄雄「清少納言の言語観」（『枕草子講座・第四巻』1976年 有精堂）。
- 6) 増田繁夫「枕草子の空間一局という世界」（『国文学解釈と教材の研究』1996年1月 學燈社）。